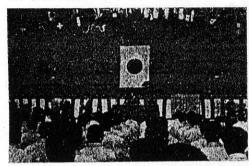
中央職業訓練所の開所式に当って

成 瀬 政 男

ご挨拶を申し上げます。本日ここに石田労働大臣のご臨席をいただき、親しくいまお話を賜わり、さらに小泉先生からは「生産勤労と民族の明日」と題し御寄稿をいただきました。有難く御礼申し上げます。各界、各層の代表の方々、かくも多数ご参列いただきまして、まことに、感謝にたえません。

わたくしたち、中央職業訓練所と、東京総合職業訓練所の教職員一同は、新しく入所しました訓練生諸君と、そのご父兄の方々とともに、今日この開所式および入所式の、この盛儀にあいあうことのできましたよろこびと光栄、さらに責任とに、胸を躍らせております。わたくしたちのこのよろこびと、光栄と責任とは、決して世の中のどこにもあるものではありません。少なくともわたくしは、か



く思っております。それと申しますのは、20年も昔のことであります。ドイツで勉強中のわたくしは、ツアイスの工場で実習を受けることになりました。ツアイスの工場は世界有数の技術、技能を誇っている工場であります。

そこのディーツェルという技師の方が、このわたくしに語りました。「ここで使っている工作機械はほとんどがドイツでつくられた機械です。われわれは、これらの機械を喜んで使っています。なぜならば、これらは、まことに立派な機械だからです。そのうえにもう一つ、よ

ろこびに堪えないことがあります。それは、この機械がいまスイスにまでも輸出されていることであります。あの有名なスイスのシップの工場までが、ドイツのこの機械を求めて使っています。とうと う私達ドイツも、世界第一流の精密工業国になりました。」こういって喜んでいました。

ドイツを去ってスイスに行ったわたくしは、ディーツェル技師のいったシップの工場を見学しよう と思いたちました。

その代理店をしている商館は海外通商といいました。わたくしは海外通商の社長、ミュラーさんに会いました。ミュラーさんは、「わがシップの工場こそ、世界第一の精度のいい機械を作る工場であり、また、それを作る工場内の機械は、それこそ世界で最高の精度、品質を誇る工作機械です。」と語りました。わたくしは、このとき、ディーツェル技師の話を思いだしました。「社長さん、わたくしはドイツのツアイスで聞いています。あなたのシップ工場では、ドイツの機械を輸入して工場に据付け、これで製品を作っているとのことです。ドイツでは、自分の国も精密機械で、世界で一流になってきたといって、このことを喜んでいました。」といいました。すると、今までのにこやかであったミュラー社長の顔が、急に真面目な顔に変りました。そして「どうぞ間違えて聞いて下さるな、外面だけを見て下さるな、スイスの国の人口は、東京の半分にも足りません。この人口だけで全部の機械を作ることができましょうか、とてもできないにきまっています。だから、間に合うものは、外国から輸入します。むろんドイツからも輸入します。しかし輸入したこれらの機械をただそのまま使っているのではありません。まず分解しその部品を点検します。これをスイスの技術、技能をもって手直しをします。そうするとこれらの部品は、以前のものとは、全くかけちがったものになってしまいます。部品が組み立てられてできた機械全体も、また、まったく違った性能の機械になります。外観

は、なるほど同じような外国やドイツの機械です。しかし内部はわれわれの技術、技能であります。 ですからでき上った機械は外国のものやドイツのものとは、全く違ったものになってしまいます。こ のようにしてできた機械が、わたくしどものところで作った機械に交っています。これらの諸機械に よって、評判のいい機械が生れてくるのです。」といいます。

自信に満ちたミュラー社長のこの言葉からわたくしは、スイスの工業の並々でないことを読みとりました。そしてミュラーさんに「スイスの工業がそれほどまでに進歩した原因を、わたくしにもっとくわしく教えて下さる所はどこでしょうか」と聞きました。「それは、チューリッヒの工科大学のギュギュレル先生です」といって先生に紹介の労をとってくれました。

チューリッヒ工科大学のギュギュレル先生に教えをこいにいったのは、いまにも雪の降ってきそうな、寒い冬の日のことでした。

先生のお話によりますと、スイスの工業がすぐれている原因は、三つあるといわれるのです。第1の原因は国情です。スイスはアルプスの連山に囲まれ、耕やすべき土地が少なく、しかもその土地は高い所にあります。いつも冷害におそわれ勝ちです。ですから農業で国を立ててはいかれません。工業品をつくり、これを外国に輸出して国を立てていくよりほかに、立っていく方法がありません。ところがドイツ、フランス、オーストリア、イタリヤも工業国ですし、海を越えたイギリスもアメリカもまた工業国です。これらの工業国に取り囲まれていますと、その工業国と競争になるものを作っていたのでは、これらの国へ輸出ができません。どうしても、これらの工業国に奉仕する機械、いい換えれば、これらの工業国になくてはならないもの、それでいてそれらの工業国ではできないもの、それを買ったときには買ったところが繁栄するものを作らなくてはなりません。

ですからスイスでは、マーグ会社のように、世界のどこの国でもできない最上の大型の歯車をつくり、またその工作機械も作り、これらを外国にだします。ライスハウエル会社のように、世界のどこの国にもない高級で、しかも量産性のすぐれた歯車研磨盤をつくり、またその歯車を作ります。エリコンのボール盤やフィツシャーの倣旋盤のように、どこの国にもない創意に満ちた機械も作ります。このような機械を求めた工場は、大変な利益を生みだします。これによって、これらの機械を求めた国に絶大なサービスを届けるようにします。ですからこれらの機械は喜んで外国が買いとります。わたくしの国では、技術、技能の水準線が、世界の水準よりも、いつも高い所にあるようにしていきます。

「第2の原因は、この大学が偉いからです。」慎しみ深いギュギュレル先生が、 自分の大学が偉大であるから、スイスの工業が偉大であると断言されました。わたくしはその大胆さに驚きましたが、すぐにそれは先生の自信と意気込みとに対する尊敬の念に変りました。先生は「大学に1人の教授の席があきますと、わたくしたちはスイス国全体を見渡し、世界第一流の人物を目安としてさがします。世界第一流の人物がみつかりますと、わたくしたちは地位に糸目をつけず、待遇にも糸目をつけません。世界で一番偉い人をこの大学にお迎えします。ですからドイツで生れたアインシュタイン博士も、この大学の教授でした。テン・ボッシュ博士も、オランダからお迎えしました。ロッシュ博士はセルビアからきていただきました。世界で一番偉い方方を、物心両面の待遇をして、ここの教授にするのです。偉い教授から教えをうけた学生は、これらの教授と同じように偉くなり、つぎつぎに、スイスの工業に関する学理を研究し、これを世界第一のものにまで高めて参ります。

「第3の原因は、技術・技能の血だ」といわれるのです。いい換えれば、血につながっている技術・技能であるといわれるのです。スイスは、技術・技能の血の流れている家庭をもっています。家庭そのものが「技術・技能の家」になりきっています。この家庭に育った子供は技術・技能の雰囲気のなかで、幼いうちから家庭内で、お祖父さん、親兄弟から技術・技能の訓練を受けます。親代々つたわっている技術・技能について、世の中の人々は、等しく、これに尊敬をはらいます。そして、祖父、父にしたがって、職場の養成工になります。これらの若者は厳格な技術・技能の訓練を受けます。養成工はその訓練が終って20才位になると国中を遍歴する行脚の旅にのぼります。こちらの有名な工場

に1・2か月、あちらの有名な工場に2・3ケ月と、国中の優れた工場の技術・技能を見置います。 若者の腕は磨きをかけられます。再び自分の工場に帰ってきたときには、以前とは見違えるばかりの 技術・技能をもった頼もしい若者になってきます。ここでこの若者は技能の国家試験をうけ、そのあ と何年かの工場での修業をしたのち、職工長(マイスター)の学校に入ります。マイスターの学校を 卒業しますと、天下晴れてのマイスターになります。自分の腕に誇りを感じながら、この人たちは、 いよいよ技術・技能にむかって精進していくのです。

ですからこの工員たちは、工員の服装をしていることに誇りを感じています。背広服を着ているよりも、工員服に身を固めていることが限りなく名誉であると思っています。工員たち一同は、自分たちが国家国民に必要な技術・技能というものを、その双肩に背負っていることを十分自覚しています。また、国も世間もそのことをはっきり認めています。ですから、このような人々は、戦いには出なくともいいのです。いや出てはいけないのです。このような技術・技能の持ち主を倒しては、スイスの国が保てないのです。国の宝である技術・技能の血を枯らしてはいけないのです。ギュギュレル先生はこのように話されました。

さて皆さん、ただ今の話は、中学校の国語の教科書第2の下巻に出ている文章です。これは、まことに申し上げることも失礼ですが、わたくしの書きました文章から国語の本にのせられたものです。いまから23年まえ、わたくしは第1回のスイスの旅にまいりました。この国の技術・技能の優れていることを目のあたりにみて驚きかつ感心しました。ひるがえって日本の国の技術・技能の劣っている事に思いを寄せ、日本の将来にさみしい思いを馳せたのであります。わたくしは日本に帰ってきて以来、技術・技能の向上に努力してきましたが、ことごとく失敗に終りました。けれどたった一つだけ成功したことがあります。それはものを書き文章にしたことであります。この文章を読んでくれた若者違は、きっと、技術・技能の教育訓練に熱心になってくれるに違いない。このように、わたくしは密かに思っておりました。

今年の2月のことであります。仙台にいましたわたくしは、突然にこちらに来いという仰せを受けました。そのときわたくしは、労働省の方から訓練事業のことを聞いて驚きました。わたくしの全然知らないあいだに、日本に技術・技能の訓練の法律ができており、審議会もできておりました。この法律は、スイスよりもアメリカよりも何処よりも立派です。その法律にしたがって、ここに中央職業訓練所が生れ、東京総合職業訓練所が生れて、皆さんは今ここにおります。ですから皆さん、いまここで、このように話をしているこの姿を、報導陣は映画や写真におさめておりますが、もしもこのニュースをわたくしが仙台で見ていたとしたら、わたくしはそれをどんなに喜んだことでしょう。わたくしはきっと23年間のつもる宿願が達せられたことを喜んだに違いありません。それを今わたくしはこの壇上に立って、こちらの所長としてみなさんにご挨拶をする人間に変っているのです。わたくしは何ともいえない光栄と、喜びと、また責任とを感じております。

しかしわたくしは思います。他日、外国の方がわたくしの所へきまして、「なぜ日本はこのような 興隆の時代を築いたのか?」、「なぜ日本の技能はこのように高いのか?」と問われましたらわたくし は「それはわたくしの中訓が偉大であるからだ」といいうるときがきっとくるものと信じています。

みなさまは、「いまの自分には何もできないのだ」といいますのでしょうが、わたくしはあなただたの見えない能力に信頼をおきます。あなたがたがこれからここで訓練を受ければ、それこそ偉大がる技能の人物になることは火を見るより明らかです。先ほど申しました、小泉先生のお話が印刷にかってここにあります。小泉先生はこの中で、「それぞれの職業に励むことによって歴史を創る」と付せられています。皆さん、わたくしたちは、これから創っていきましょう。一所懸命にいたしましょう

今日, ここにおいで下さいました皆々様がた, あるいは国民のかたがた, これから立派な中央職訓練所をつくって参りますということを申しあげ, 今日の御挨拶をおわりたいとおもいます。